

富山曼陀羅彩

越翡翠 | 白綠色 |
 越翡翠 | 紫苑色 |
 越翡翠 | 青磁色 |
 越碧
 越琥珀

富山曼陀羅彩

TOYAMA MANDARA SAI



ごあいさつ

富山市では、ガラスをテーマとした政策をまちづくりの柱の一つに掲げ、昭和60年の「富山市民大学ガラス工芸コース」開設を皮切りに、平成3年には公立では初となるガラス造形の専門教育機関「富山ガラス造形研究所」を、またガラス作家の創作活動や制作体験などによる市民への普及を図る施設として、平成6年には「富山ガラス工房」を整備してきました。

さらに、平成27年には、ガラスのまちづくりの集大成であり、現代ガラスアートなどを鑑賞できる「富山市ガラス美術館」を開館するなど、ガラスに携わる人材の育成、産業化の推進、芸術の振興という3つの観点からさまざまな取り組みを行っております。

こうした取り組みによって、市民の皆様にとってもガラスの魅力や創作の楽しさが身近になりつつあり、また、ここ富山を拠点に多くのガラス作家が国内外で目覚ましい活躍をすることで富山のガラスは全国的にも知名度が高まっております。

富山ガラス工房では、こうした恵まれた環境を活かしながら「ガラスの街とやま」の認知度を一層拡大し、深化させていくために、平成11年から約20年の歳月をかけて、ほかにはない「色」の開発に向け弛まずに研究をしてきましたところ、このたび全5色のオリジナル色ガラス「富山曼荼羅彩」が完成いたしました。

本冊子では、ガラスに彩られた「富山のライフスタイル」として世の中に定着するきっかけとなるよう、器や作品の紹介と日常での活用例に留まらず、作家の作品創りにかける思いなども紹介しております。

富山曼荼羅彩が、器やグラスなどを通して食卓を彩ることで、暮らしの中のガラスの楽しみ方、さらにはガラス作家の新たな活躍の一助となり、ひいては芸術文化の薫り高い「ガラスの街とやま」に寄与することを心より期待しております。

2021年 3月

森 雅志
富山市長

富山らしさの表現とは…

1986年富山市民大学ガラス工芸コースの講師につき、この地に住まい35年になる。富山に根付いている銅器、アルミ、木彫、漆器、挽物、和紙、プラスチックなど産業を発展させた発生の源流は、立山曼荼羅の絵描きをしながら、全国各地の情報などを広める役割を担った立山信仰と、独自の商法で全国に菓を普及させた越中売菓、そして北前船。この3つの歴史が根底にあるように思う。翡翠やお札や菓という「モノ」を介して、人と人との対話を通してゆっくりではあるが確実に情報ネットワークを広げていった。

ガラスも目に見える形をただ表現するだけでなく、この土地が育んだ自然・風土から醸し出されてくるものに耳を澄まし反映させることが大切だと強く思っている。

2001年に朝日町などで採れる翡翠の廃石を有効活用し「越翡翠硝子」（白緑色）を開発した。ここから世界でここにしかない富山独自の「和の五彩ガラス」を生み出す試行錯誤が始まる。

5000年前の縄文時代前期頃に糸魚川に出現した翡翠の生産拠点は世界最古の「翡翠文化圏」と言われている。その中心にここ越中が含まれている。（2016年 国の石に指定）2007年に富山大学の金森 寛名誉教授と共同開発した越碧硝子、そして越翡翠硝子 紫苑色、青磁色、越琥珀硝子と20年かけて「富山曼荼羅彩」を完成させた。

大量生産では決して表現できない「もの」を人と人の繋がりを大切にする地域性を生かし、ガラスと異素材を複合したデザイン性の高い新しい表現領域の開拓に取り込み発信することによって、大量消費型から脱却したい。

ガラス、それは人の手より生まれ、人の手により消えていく儚いものではあるが「いのち」あふれる「かたち」はいつか立ち現れ、人々の心の中で連なっていくものだと信じている。今後の展開が楽しみだ。

2021年 3月

野田 雄一
富山市ガラス工房 館長

第1章 富山で生まれた色

越翡翠硝子三色

こしのひすいがらす さんしょく

遙か昔から、いまに彩る三色の美

フォッサマグナ沿いにある富山県東部の朝日町と隣町の糸魚川市の近郊で採掘されてきた翡翠は、縄文時代より勾玉などに用いられた神秘的な宝石。2016年に「国の石」に指定された。1999年 朝日町の翡翠加工工房では、宝石になる部分以外は廃棄されていた。当時、「富山独自のガラス」とは？と思案していたこともあり、翡翠の成分を調べ、ケイ素が主成分であることから、ガラスとの調合実験が始まり、2001年緑色翡翠色をガラスで再現し、越翡翠硝子と名付けた。2018年 紫苑色硝子と青磁色硝子の調合を試み翡翠三色が揃った。この淡くてやさしいガラスの色は、日本人の感性にとってもあう。

【長谷川窯業研究所・富山大学理学部と共同研開発】

和田 修次郎 Wada Shujiro
ボトル | 90W×60D×120H



青磁色

紫苑色

白緑色

びやくろくいろ
越翡翠 白緑色

古代より、みどり色が神秘的で特別な色彩として珍重・意識されたのは、それが生命(力)の象徴として不老長寿・再生の願いを込めていたと考えられる。2016年の日本鉱物科学会で翡翠が「国の石」に選ばれた。翡翠という文字は本来、カワセミを意味する水鳥でその美しい色合いが翡翠の宝石名になったと言われている。「翠」の字のごとく深い緑色が代表する色であるが、藤色、青色、黄色の翡翠もある。1999年にスタートした「新素材開発プロジェクト」の第1号の成果が、この白緑色である。開発には長谷川窯業研究所の協力により小牟禮尊人が担当。2001年完成



1 佐野 曜子 Sano Youko
鉢 | 150Φ×70H

2 佐野 曜子 Sano Youko
鉢 | 150Φ×70H

3 小寺 暁洋 Kotera Akihiro
コンポート | 135Φ×85H

色の開発に携わった作家からのコメント



小牟禮 尊人

翡翠硝子はヒスイ鉱石からジュエリーとして使えない廃材部分を利用し、ヒスイ色のガラスを作る目標で始まりました。硬度の高いヒスイ原石を粉末にするのは一苦勞でした。当時、東京ガラス工芸研究所の長谷川先生に指導を頂きながら、試験を重ねておりました。現在も新色の研究開発に繋がっているとの事、嬉しく思います。



内田 悠介

調合は、成分の僅かな含有量が特性に大きく影響する繊細な作業でした。原料は粉状、砂状で色もありませんが、熔融すると美しい越翡翠になり感動しました。とても大切に受け継がれている素材です。



4 田中 沙弥佳 Tanaka Sayaka
オーナメント | 240Φ×5H

5 和田 修次郎 Wada Shujiro
花器 | 150Φ×210H

し おん いろ 越翡翠 紫苑色

ラベンダー翡翠と呼ばれる淡い紫色の翡翠がある。

春の光を透過させて、色の効果で藤の花、桐の花の彩りを表現出来ればと思った。

紫色が愛された平安時代、紫を「ゆかり」と読むこともあり、人との縁を象徴する意味が込められた色でもある。

この色を用い多種多彩に表現し、生活空間に豊かな彩りを添えることが出来ればと思う。



1 佐々木 俊仁 Sasaki Shunji
鉢 | 155Φ×50H

2 佐々木 俊仁 Sasaki Shunji
皿 | 180W×170D×20H

3 金 東希 Kim Donghee
花器 | 140Φ×135H

色の開発に携わった作家からのコメント



小寺 暁洋

紫苑色で初の色ガラス調合に挑戦しました。今まで当たり前に使っていた色ガラスが0.1g単位の試行錯誤の上でできたものということを痛感する仕事でした。美しい発色が出たとしても膨張率の違いで割れてしまいます。1年以上かけて完成した富山の紫「越翡翠硝子紫苑色」をぜひ手に取って頂ければと思っています。



金 東希

綺麗な色を出すまではスムーズな方でした。しかし色の成分的に透明のガラスと合わせるのが難しいようで、試し調合の度に割れてしまい心が折れることもありました。0.1g単位の微調整を重ね、ついに最適な状態の紫苑翡翠ができました。



4 永岡 千佳 Nagaoka Chika
カップ | 95Φ×75H

5 和田 修次郎 Wada Shujiro
花器 | 150Φ×195H

せいじいろ 越翡翠 青磁色

翡翠輝石自体が発するものとして、紺色に近い「コバルト翡翠」がある。
可視光のスペクトル上で紫と緑色の間に青色があり、高麗人が「翡色」と呼び、翡翠にも似た透明感のある灰青緑色の美しい釉色の高麗青磁は、これまで多くの人々を魅了している。今回開発した青磁色の半透明の硝子は、幻想的に空一面に立ち込める薄青色の靄の世界・包み込む情景を想像し生み出された。



1 内田 悠介 Uchida Yusuke コンポート | 110Φ×95H
2 小林 洋行 Kobayashi Hiroyuki 長角皿 | 140W×105D×10H
3 小宮 崇 Komiya Takashi 皿 | 285W×285D×50H

色の開発に携わった作家からのコメント



小林 洋行

色の原料には様々な薬品を使用しており、洋服の上に専用の着衣を着て作業する為、真夏の暑いさなか作業着の中は汗だくになります。上品で落ち着いた青になるよう何度も調合と原料溶融を繰り返し、越翡翠硝子青磁色は誕生しました。



森 智広

越翡翠硝子青磁色の開発をはじめから携わり、色の開発の難しさを知ることができました。何度も実験を繰り返し漸く製品化に至りました。是非淡いブルーのガラスをお楽しみいただければと思います。



4 小宮 崇 Komiya Takashi ゴブレット | 80Φ×155H
5 中尾 雅一 Nakao Masaichi オーナメント | 95Φ×50H

第1章 富山で生まれた色

越碧硝子

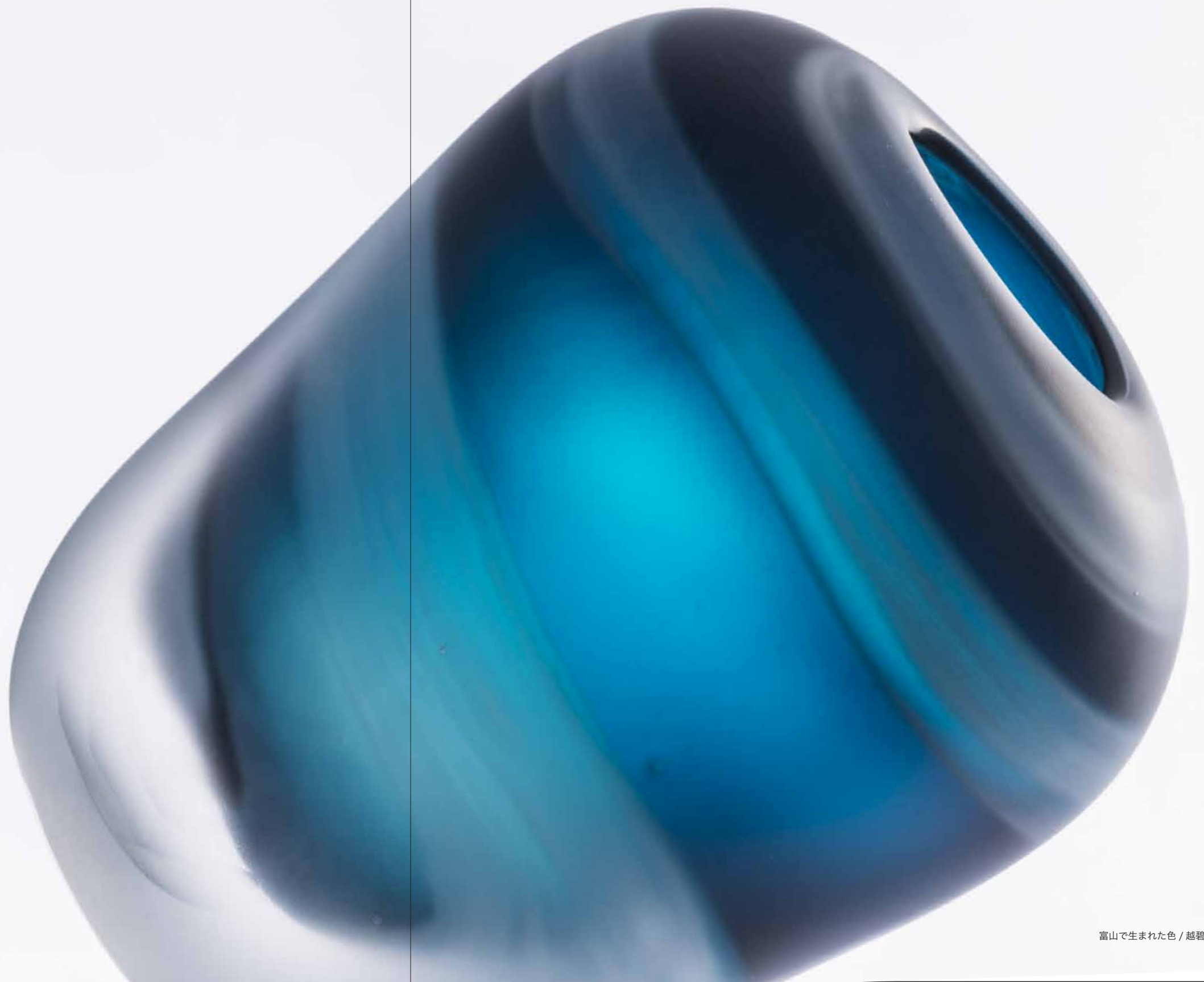
こしのあおがらす

富山らしさを表現した、深い青

富山湾の地形は、一気に水深1000mの海底まで達していて、「藍瓶」と呼ばれ白えびやベニズワイガニ、ホタルイカの住処となっている。色ガラスの大半が欧米からの輸入品という現状を考え「和の色合い」を開発することで四季を通じて食を楽しむことが出来る。富山の気候・風土・文化に合った青緑色のガラスは、2006年 富山大学理学部で実験後の金属化合物「遷移金属」を活用することから始まり、他の地域にはない特有のガラスで、色を見れば産地が分かる新しい色といえる。

【富山大学理学部と共同開発】

古野 怜奈 Huruno Reina
花器 | 180W×80D×150H





1



2



3

1 北村 三彩 Kitamura Miya
皿 | 310Φ×35H

2 坂田 裕昭 Sakata Hiroaki
皿 | 215Φ×30H

3 小寺 暁洋 Kotera Akihiro
コンボート | 130Φ×75H

色の開発に携わった作家からのコメント



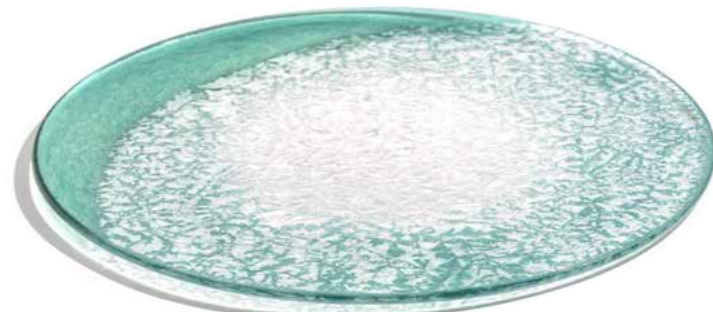
名田谷 隆平

「越碧」の開発に2006年の当初から参加し、富山大学金森研究室で調合された材料をガラス工場の設備で熔融する方法を探りました。研究室での成果を工房で再現することが難しく、夜通し材料を攪拌しデータを集めた事を思い出します。



古賀 雄大

調合はもちろん炉の環境や時間で変化する色なので、毎日色の様子を記録し調整しました。時間をかけて熔融し、緑から碧へ変化する過程で深い碧の瞬間を見極めるところが越碧を作る上ではとても重要です。個人的にも越碧は好きで、似た色の車に乗っています。



4



5

4 杉江 真奈美 Sugie Manami
皿 | 290Φ×5H

5 小宮 崇 Komiya Takashi
ゴブレット | 90Φ×185H

第1章 富山で生まれた色

越琥珀硝子

こしのこはくがらす

進化し続ける、実りの輝き

越の国の大地に輝く稲穂の波色をイメージした黄金色の琥珀硝子は、正倉院宝物中の白瑠璃椀、白瑠璃瓶【ササンガラス】を思わせる。2009年に着手した、溶融スラグ（可燃ごみを焼却した灰を1200度以上の高温で溶融してできる人工砂）を活用した淡い茶色ガラスで特許承認。その時得たノウハウを参考に試行錯誤を繰り返し、2020年に作業性の良い琥珀色ガラスが完成。今後、2億2,900万年前のジルコン鉱物粒子が含まれている宇奈月花崗岩を琥珀色ガラスに用いる方法を計画している。

【富山大学理学部 名誉教授 金森 寛氏と共同開発】

古賀 雄大 Koga Yudai

ぐい呑み | 70Φ×65H





1



2



3

1 下田 顕生 Shimoda Kensei
鉢 | 150Φ×50H

2 古賀 雄大 Koga Yudai
ロックグラス | 80Φ×85H

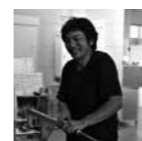
3 小宮 崇 Komiya Takashi
ゴブレット | 90Φ×135H

色の開発に携わった作家からのコメント



小宮 崇

富山ガラス工房のスタッフとして働かせてもらうことになった年に5つの色が揃う年と重なったことは運命のようなものを感じます。琥珀色はその名に負けず原始的な力強さと気品を持ち合わせている様な、人々を魅了するような色だと思います。私個人的にもとても好きな色なので今回の琥珀色の担当となれたことを嬉しく思っております。



和田 修次郎

『富山の大地』をテーマにした越琥珀硝子。黄金色に輝く田園風景をイメージして始まった色づくりは、琥珀の飴色そして古代ペルシア伝来のガラス、正倉院宝物【奈良】「白瑠璃碗」(はくるりのわん)の色合いを参考にし、何度も調整を繰り返す、ようやく納得のいく色に仕上がりました。



4



5

4 小宮 崇 Komiya Takashi
コンポート | 140Φ×110H

5 和田 修次郎 Wada Shujiro
花器 | 130Φ×190H

第2章 対談

色の誕生



翡翠、碧、琥珀と、日本の伝統色を意識した富山オリジナルのガラス「富山曼荼羅彩」。

開発に携わった野田雄一・富山ガラス工房館長と、金森寛・富山大学名誉教授に

開発秘話を聞きました。(聞き手・青山郁子/毎日新聞 記者)

野田 雄一 Noda Yuichi

徳島県生まれ。徳島大学工学部在学中に同県出身の作家瀬戸内寂聴氏が主催する私塾「寂聴塾」の塾生となり薫陶を受ける。1986年、富山市民大学ガラス工芸コース講師。88年「国際ガラス工芸展'88」銀賞(金沢市)。03年～16年、富山ガラス造形研究所教授。06年～、富山ガラス工房館長。07年「第4回円空大賞展」円空賞(岐阜県美術館)。08年「変幻するガラス-野田雄一の世界(宇宙)展-」(日仏文化センター/パリ・ナンシー)。北日本新聞文化功労賞。

金森 寛 Kanamori Hiroshi

1947年8月、和歌山県生まれ。大阪大理学部卒業。72年、同大学院理学研究科を修了し同年、富山大学文理学部(77年から理学部)助手。82年、理学博士(大阪大学)。88年、富山大学理学部助教授、97年から教授。2013年定年退職し、現在名誉教授。神戸市在住。

「富山曼荼羅彩」誕生のきっかけとなったお2人の出会いは。

野田 金森先生の奥様が富山市民大学ガラス工芸コースの受講生だったので
きっかけで、2006年に知り合いました。

金森 私の専門は無機化学といって、鉄、銅など遷移金属の化合物について研究
していました。研究中に発生するコバルトや銅を含む廃棄物は専門業者に
引き取ってもらっていました。野田先生からお誘いを受け、それらを使
ってガラスの色作りをできないかと思ったのが最初です。つまり研究の
スピノフ。学生時代は美術部だったので、色には興味がありましたね。

いろいろ試行錯誤されたと聞きました。

野田 翡翠シリーズは、金森先生との共同研究の前に始まりました。朝日町は翡翠
の産地として有名ですが、原石から採れるのはほんのわずか。残りは捨て
られていると知り、それはもったいないと思い、1999年に翡翠を使った
富山独自の色の開発を長谷川保和氏(故・長谷川窯業研究所所長)に協力
していただき、当時スタッフの小牟禮尊人氏(現・秋田公立美術大学教授)
が担当として「世界に通用する素材開発プロジェクト」が始まりました。成分
分析から始まり、粉末にして融合、徐冷などスタッフとともに失敗を重ねて
2001年によく初めての翡翠色のガラスが誕生したのです。

金森 私は越碧から研究に加わりました。最初に、まず青にしましょうということで
スタートしました。はじめはコバルトと銅で青を作ってみました。色に深み
がない。そこで第三の成分としてクロムも混ぜてみました。しかし、クロムは
ガラスになじみにくく、発色が安定しない。たまに良い色が出ても、再現でき
ないのです。そこで最初にクロムだけを融かしたガラスを作り、細かく砕いて
混ぜるとうまくいきました。ガラスを透かしてみると、青から緑色に変化して、



宮崎・境海岸(ヒスイ海岸)にて



これは世界中どこにもないと確信しました。その時は本当にうれしかった
ですね。そのガラスで作った酒器で飲むお酒は本当においしいものです。

たくさんの人が関わって生まれた美しい色なのですね。

野田 実は、現在私たちが使用している色ガラスの原料はほとんどが欧米などから
の輸入品です。故に日本の色ではないのです。そこで世界中どこにもない
「和の色」を作り出したかったのです。だからこそネーミングも「和」にこだわ
りました。「ガラスの街」と名乗る場所は日本全国にたくさんあり、特徴を
打ち出していくには、色が一番分かりやすいでしょう。

金森 私も長い研究生活で、ガラスの素材開発は初めてでした。2013年に定年
退職しましたが、今でも富山曼荼羅彩は改良が続いており、完成というわけ
ではありません。これからもさらに美しい色を追求してほしいですね。

ガラスのオリジナル色の開発は、世界でも珍しい取り組みと聞きました。

野田 もともと富山県は木彫や銅器など職人がたくさんいます。今まで点と点だった
職人集団をガラスでつなぐことが富山にとってもガラスにとっても武器になる
はずです。しかし、いかんせん富山県人は技術は高いが、PRが苦手。これ
からは、どう使ってほしいなど具体的な提案を盛り込みながら、更なるオリジ
ナリティーを追求していきたいですね。

金森 自己満足では終わらないことが大切なのです。
実は翡翠というのは日本の国石なのです。中国や韓国では宝石として珍重
されており、翡翠硝子への関心も高い。富山曼荼羅彩も国内だけでなく
国際的に飛躍してくれると開発に携わったものとしては嬉しいですね。



ヒスイテラスにて翡翠原石と

第3章

KAKERU ガラス



ラ・アンサンブル 店長
水原 政子 Masako Mizuhara

流行だけを追わず、洗練されたセンスで幅広い年代の女性ファンから支持されるセレクトショップ「ラ・アンサンブル」。店長の水原政子さんが、翡翠色のブローチにコーディネートしたのは、胸元のカットワークがおしゃれな白いニットと、定番ブラウス。白と翡翠色の組み合わせは、雪解けと共に芽吹く木々や若芽をイメージさせ、春の訪れを感じさせる。ブラウスにはボタン風にあしらった。「ガラスのきれいな色を引き立たせるには白が一番。春らしく可愛い雰囲気になりました」と水原さん。

ラ・アンサンブル 富山市南田町1-6-1/TEL076-423-5557

衣×ガラス



酒業工房だい 店主
村井 大輔 Murai Daisuke

2000年に富山市にオープンした「酒業工房だい」は、地元産の新鮮な食材と器を使った独創的な日本料理が人気。知る人ぞ知る隠れ家的名店だ。普段から冷たい料理には作家もののガラスの器を用いる。今回、店主の村井大輔さんがメインの器に選んだのは「越翡翠硝子の青磁色」。山田村産そば粉の十割そばに、白エビの県産米粉揚げを添えた。器を引き立てるシンプルな料理ながら、雪解けをイメージさせる色彩の組み合わせで、富山の春らしい一皿となった。

酒業工房だい 富山市内幸町2-14 内幸ビル2F/TEL076-441-2223

和食×ガラス



レストラン リコモンテ 料理長
後藤 浩実 Goto Hiromi

昼間は立山連峰を臨み、日が暮れると夜景が美しいスカイレストラン「リコモンテ」。後藤浩実料理長がセレクトしたのは「吸い込まれるようにきれいな色に、空が広がる感じがした」という琥珀色の大皿。大地をイメージした器に盛り付けたのは、富山湾の魚介ミートソースの Pasta。青磁色の角皿にはパンを、棒付きのボウルにはサラダと、バランスよく仕上げた。富山に来て7年が過ぎた後藤料理長。美味しい地元食材を使ったフルコースには、やっぱり富山のガラスがよく似合う。

レストラン リコモンテ 富山市新富町1-2-3 富山エクセルホテル東急15階/TEL076-441-0015

洋食×ガラス

掛ける、描ける、駆ける、翔ける……。 「かける」を漢字に変換すると、イメージは無限に膨らみますね。富山ガラス工房では、毎日たくさんのガラス作品が誕生していますが、その使い方もまた無限に広がります。衣・食・住のテーマで、各ジャンルのプロフェッショナルの方々にお話し、ガラスの使い方の可能性を探ってもらいました。



中国料理 リトル上海 総料理長
栗田 高文 Kurita Takafumi

厨房から運ばれた一皿は、思わずため息が出るほどの美しさ。野菜彫刻の名人でもある中国料理「リトル上海」の栗田高文総料理長は、甘エビや紅ズワイガニなどの富山湾の幸で海のストーリーを奏でる。器は越碧を中心にしたコンビネーション。大根で彫り上げた北前船が打ち寄せる波間を走り、陸地では小鳥が春の到来を告げる。業膳料理でコラボレーションして以来、「温もりが感じられ、お客さんの反応も違う」と富山ガラスのファンとなった栗田総料理長。「富山に来て23年。応援して下さるお客さんへの恩返しのできる気持ちで美味しい料理を提供していきたい」。

中国料理 リトル上海 富山県富山市千歳町1-3-1 パレ・ブラン高志会館 1階/TEL076-441-2255

中華×ガラス



引網香月堂 4代目店主
引網 康博 Hikiami Yasuhiro

テーマは「水辺の桜」。越翡翠の白緑色でマーブル模様をあしらった銘々皿は、桜の花びらをかたどった干菓子で「花筏」を表現。青磁色のモザイク模様の平皿には、淡いピンクの上生菓子「初花」を咲かせた。越碧の茶碗には透明な寒天をあんみつ仕立てで。器の曲線を川の流れるに見立てた一皿は、春まだ浅き日に、清冽な水を手ですくった感触を彷彿とさせる。大正8年創業の老舗和菓子店「引網香月堂」の4代目店主、引網康博さんは「富山の水辺に咲く満開の桜を思い浮かべて召し上がってください」。

引網香月堂 古沢本店 富山市古沢111-3/TEL076-471-8755

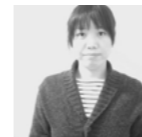
和菓子×ガラス



フラワーデザイン KAZU
浦田 和夫 Urata Kazuo

その場の雰囲気を華やかに演出するフラワーデザイナー、浦田和夫の花々。「富山曼荼羅彩」に合わせた作品は、特に色とフォルムを意識した。水仙、ガーベラ、デンファレ、ストレッチアなど春の風を運ぶ植物たちが、富山色の花器を引き立て、フォルムも美しく見せる。ガラスという冷たいイメージを持った無機物が、植物という有機物によって命が吹き込まれたのだ。花は生活に彩りをもたらしてくれる。「おうち時間が増えた今、富山のガラスと花で、家の中を照らしてみてもいい」と優しく花に寄り添う。

花×ガラス



金津 沙矢香

作家からのコメント

着るものを選ばない、シンプルな形をデザイン。彩りを何色か合わせることで、薄い色、濃い色どちらの服装にも合う使いやすいアクセサリを目指しました。



1



2



3



4



5

1 金津 沙矢香 Kanazu Sayaka
イヤリング ピアス | 10W×35H・10W×20H

2 金津 沙矢香 Kanazu Sayaka
ブローチ | 30~40W×30~40H

3 林 裕子 Hayashi Hiroko
ネックレス | 100W×170H

4 林 裕子 Hayashi Hiroko
ピアス | 20W×60H

5 ワタナベ サラ Watanabe Sara
指輪 | 20Φ×5W





1



2

1 高橋 俊順 Takahashi Toshinori
皿 | 250Φ×30H

2 小路口 力恵 Shojiguchi Rikie
鉢「ふくら」 | 130W×125D×55H



高橋 俊順

作家からのコメント

富山の豊かな自然をテーマにしています。富山で採れた食材を乗せ富山を満喫してもらえたらいいという思いで制作しました。



3



4



5

3 梶原 朋子 Kajihara Tomoko
小皿 | 145W×95D×25H

4 梶原 朋子 Kajihara Tomoko
小皿 | 140W×100D×25H

5 梶原 朋子 Kajihara Tomoko
ぐい呑み | 80W×70D×55H





1



2

1 佐々木 俊仁 Sasaki Shunji
皿 | 280Φ×40H

2 北村 三彩 Kitamura Miya
器 | 170W×120D×115H



作家からのコメント

朝日を受けて光り輝くさざ波、夕焼け色に染まる水田…富山の美しい自然の輝きを器に
込めました。

佐々木 俊仁



3



4

3 小路口 力恵 Shojiguchi Rikie
皿「とあい」 | 150W×150D×25H



5

4 佐野 猛 Sano Takeshi
ワイングラス | 90Φ×220H

5 佐野 猛 Sano Takeshi
ワイングラス | 90Φ×210H





1 轟林 舞美 Turubayashi Maimi
ボール | 160W×160D×80H

2 轟林 舞美 Turubayashi Maimi
ボール | 170W×150D×80H

3 内田 悠介 Uchida Yusuke
コンポート | 110Φ×95H



轟林 舞美

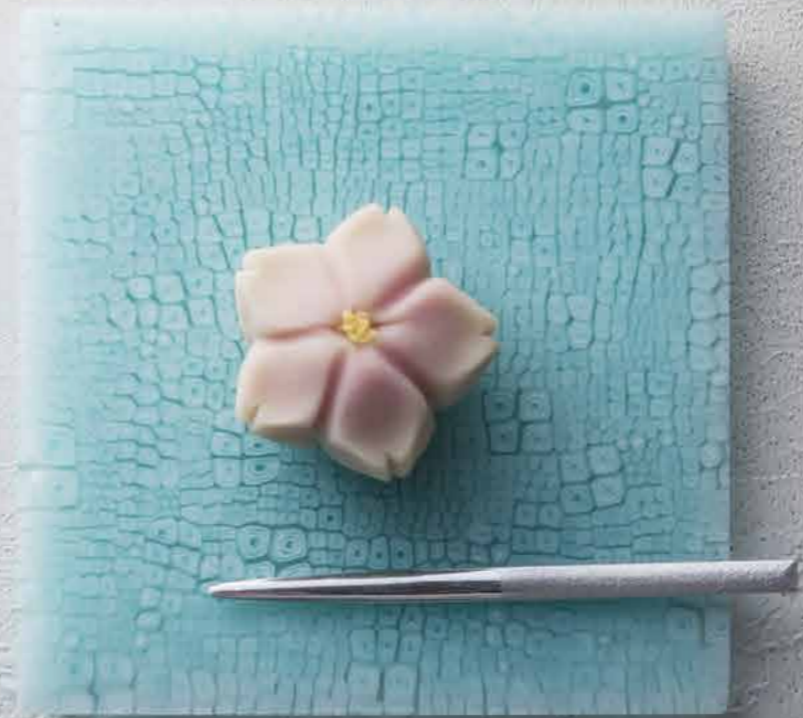
作家からのコメント

乳白色の淡い色合いから、貝殻をイメージしたうつわを制作しました。



4 小宮 崇 Komiya Takashi
皿 | 255W×250D×20H

5 小宮 崇 Komiya Takashi
皿 | 410W×275D×45H





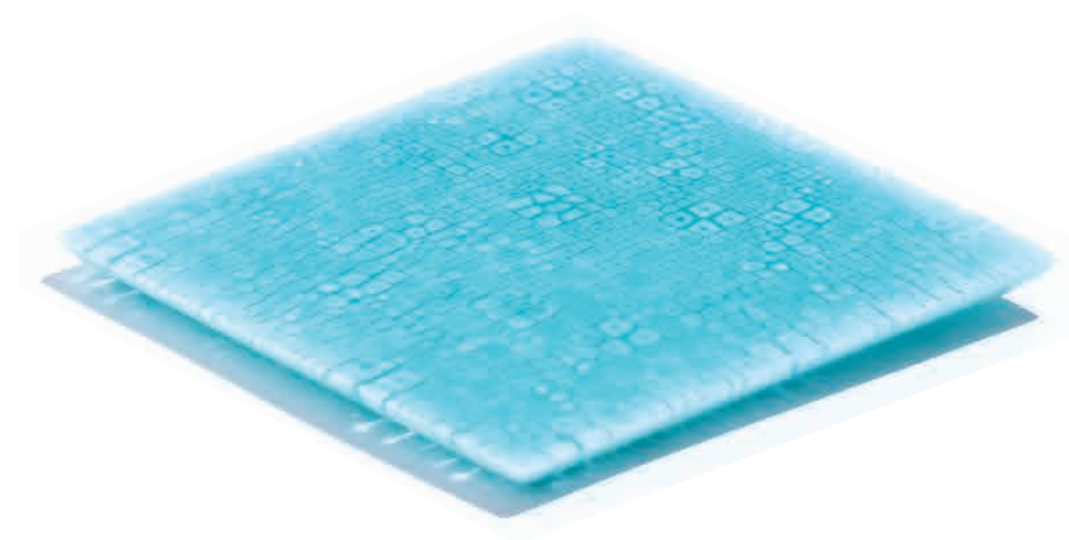
小路口 力恵

作家からのコメント

自分らしさを保ちつつ普段使わない色をどのように取り入れ、どのように活かすか…。全体に色を入れず抜けを作る事で硬い印象にならないようにし、またその抜けの部分を盛り付け時に楽しんでいただけたらと考え制作しました。



1



2

1 小路口 力恵 Shojiguchi Rikie
鉢「ふくら」| 130W×125D×55H

2 金 東希 Kimu Donghee
角皿 | 130W×130D×10H



3

3 古賀 雄大 Koga Yudai
トレイ | 130W×115D×10H





1



2



3

1 光井 威善 Mitsui Takeyoshi
花器 | 190W×40D×180H

2 光井 威善 Mitsui Takeyoshi
花器 | 190W×40D×180H

3 森 智広 Mori Tomohiro
花器 | 180Φ×270H



光井 威善

作家からのコメント

花瓶として使うだけではなく、花器そのものがオブジェとなりえるようなモノにしたかった。越碧や越琥珀の色ガラスの美しさをできるだけシンプルに生活の中で感じられるように写真のように平面的な存在がポイントの作品。



4



5

4 中尾 雅一 Nakao Masaichi
花器 | 200Φ×120H

5 小宮 崇 Komiya Takashi
花器 | 230W×220D×100H



北村 三彩 Kitamura Miya
照明 | 170Φ×300H



作家からのコメント

柔らかい彩りと、曲線によって生まれる光の強弱。毎日共に過ごすものだからこそ、特別でありたい。ゆったりとした時とともに、一緒に居るモノ。

北村 三彩



2



1



3

1 輪島 明子 Wajima Akiko
照明 | 120Φ×200H

2 東南 早織 Tonan Saori
オーナメント | 80W×80D×10H

3 和田 修次郎 Wada Shujiro
ブロック | 120W×60D×25H



COLUMN

ガラスのある ライフスタイル提案

スマートで洗練されながらも、何かしら人の温もりが感じられる空間。近藤さんの手にかかる、不思議とそんな場所が生まれる。

今回のリニューアルを担当した近藤さんと富山のガラスとの付き合いは長い。2013年、ガラスと異素材とのコラボレーションに挑んだ「富山マテリアルワークショップ」に参加。4年後には、富山のガラスを建築素材としてデザインし、東京都内で「トヤママテリアル」と題した展示会も開いた。「これだけたくさんの作家がいて、様々な分野とのコラボレーション作品を生み出しているのは、富山市の他にないのでは」と高く評価する。

新しい空間のデザインにあたっては、従来の「工房に併設されたショップ」というイメージを一新。「全体を統一するライフスタイルの提案」を重要視したという。ガラスをどんな風に使ったら豊かなライフスタイルになるか、また作品の魅力が最大限に発揮できるようにとの思いを込め、

プランを練った。長年、富山のガラス作家たちと交流しながら新しいジャンルを開拓してきた近藤さんならではのこだわりが、ここにはある。

新型コロナウイルス感染症の影響で、リニューアルオープン当日までに実際の空間を見ることはできなかった。それでも、富山から送られる映像や画像に、「圧倒的に以前のホワイトキューブスペースとは違う」と満足する。そして「作家が自分のライフスタイルをガラスで表現できる場として、また新設した壁面を利用して、作品が完成に至るまでのスケッチやエスキースなどを展示するなど、作家自らが考えて使ってほしい」とアドバイスする。

来場者からは、「個々の作品が見やすくなった」「高級感がある」など好評を得ている新空間。クラフトや器としてだけではなくガラスの可能性を広げる空間として期待が高まるばかりだ。



インテリアデザイナー
近藤 康夫 Kondo Yasuo

1950年生まれ。1972年東京造形大学造形学部デザイン学科室内建築専攻修了。三輪正弘環境造形研究所、クラマタデザイン事務所を経て近藤康夫デザイン事務所設立。元九州大学大学院教授、元東京造形大学デザイン学科室内建築特任教授。インテリアデザインを中心にプロダクト・建築デザイン等幅広く活動。代表作は2000年度 毎日デザイン賞を受賞した東証アローズ。

第4章

富山のガラス

-それは人を育てることから始まった-

'85 富山市民大学ガラス工芸コース 開設



'89 社会福祉法人富山市社会福祉協議会のガラス工芸共同作業所 開設

'91 富山ガラス造形研究所 開校

学校名には、ガラス「工芸」ではなく「造形」という言葉が選ばれました。



富山ガラス造形研究所



'94 4月 富山ガラス工房 オープン

3月30日に吹きガラス溶解炉の点火式が行われ、富山ガラス工房の歴史が始まりました。



'94 6月 富山ガラス工房での「吹きガラス体験コース」が始まる

毎週日曜日の午前・午後、各5人ずつの体験コースを開始。当日の受付のみの対応だったため、参加することができなかった希望者からの苦情が出るほどの大盛況となりました。



富山ガラス工房「吹きガラス講座」の受講者により「トヤマ・グラススタジオ友の会 ポンテ」が結成される



友の会の愛称「ポンテ」は、イタリア語で「橋渡し」を意味します。吹きガラス制作の工程ではおなじみの言葉。

10月 富山ガラス工房のお祭り、「TOYAMA GLASS FESTA 94」を開催

地元商工会とタイアップし、呉羽梨のワインを工房特製のグラスで提供する企画が好評でした。



イタリアの巨匠、リノ・タリアピエトラ氏を招き、造形研究所とガラス工房の共同で実際に制作する姿を公開。多くの人が驚きを持って見つめました。

'95 5月 富山ガラス工房1周年フェスタで池田満寿夫氏がガラスに挑む



池田満寿夫と富山ガラス

版画家にして、芥川賞作家。異能のアーティスト、池田満寿夫は晩年、陶芸に没頭しました。工房では、粘土で原型を作り、それを型にとってガラスを流し込む「ホットキャストティング」の技法で、古代の陶器をイメージしたオブジェの制作に挑戦。ガラスについて「陶芸より表現の可能性を持っているんじゃない!？」と興味津々の様子で、工房スタッフとのコラボレーションを楽しみ、大皿やぐい呑みなどを次々と制作し見学者たちを魅了しました。



12月 友の会「ポンテ」が第1回会員展を市民プラザで開催

工房所属作家と「ポンテ」メンバーとの合同制作は富山にガラス文化を根付かせる試みとして実施され、これ以降、年末の恒例行事となっています。

'96 ガラスの街づくり事業が始まる

富山市内にミニケースギャラリーが設置され、街中にガラスアートが点在し始めます。同年9月にオープンした富山市芸術文化ホール(現在のオーバードホール)にはガラスのオブジェが8点設置され、劇場空間へと誘います。



富山ガラス個人工房が呉羽に建設される



'97 11月 アーティスト日比野克彦氏が「カルティエ 新作 トリニティコレクション」発表記念イベントのためのガラスオブジェを富山ガラス工房で制作



日比野克彦と富山ガラス

段ボールを使った造形作品で広く知られる日比野克彦と富山ガラス工房とのコラボレーションは、1997年秋のガラスフェスタ「SYOKU・触・食・色」がきっかけでした。ガラスの持つ表現性が日比野氏のインスピレーションを呼び起こすこととなり、カルティエをはじめ、野田秀樹演出の舞台『赤鬼』の小道具制作や、アウディの新車発表会でのオブジェ等、多岐にわたる共同制作へと発展しました。



『BRUTUS』1998年2/15号

‘97 6月 「公募 私だけのオリジナルグラス」展を開催
「マイ・グラス」のデザインを公募したところ県内から220点のデザイン画が届きました。その中から、ブドウやフクロウ、犬をモチーフにした物など10点を富山ガラス工場の所属作家が実際に制作。「初夏のガラスフェスタ」で、デザイン画とともに展示し、人気投票を行いました。



‘98 4月 富山市の松川に
全面的なガラス高欄の安住橋が完成
アルミサッシと板ガラスの二次加工メーカーが集中する富山という土地柄をいかした大掛かりな作品が、日常の風景に溶け込んでいます。



‘99 「世界に通用する新素材開発プロジェクト」
富山ガラス工房オリジナル色ガラスの開発が始まる
開発のテーマは4つ。「和紙のような縞模様を生じ乳濁するガラス」「焼結による光彩ガラス」「金属と融合させる新しいガラス」そして「ヒスイの廃石の有効活用」。原料の調達、調合計算、特性値の測定などを繰り返し、開発が続けられました。

‘00 「富山ガラス工房の定番商品」の開発開始
プロダクトデザイナーの安次富隆氏、リビングデザイナーの小泉誠氏、高岡デザイン工芸センターの金子隆亮氏の協力を得て、工房所属作家たちがワークショップの形式で商品開発を進めていきました。



2月 秋篠宮ご夫妻が富山ガラス工房の共同工房で
吹きガラスを体験される
秋篠宮殿下が灰皿を、紀子様が一輪挿し作りに挑戦される様子を大勢の人々が見守りました。



『女性自身』2000年3/21号

‘01 富山ガラス工房オリジナル色ガラス
「越翡翠硝子」が誕生



縄文時代より珍重されてきた翡翠の神秘が溶け込んだ淡いグリーンガラス。富山県朝日町の宮崎海岸で採れた翡翠の廃石が原材料として活用されています。



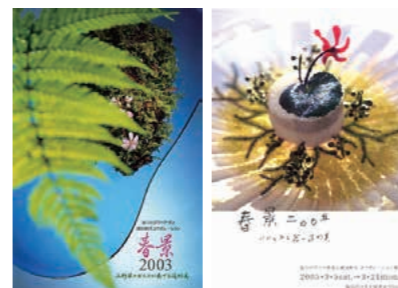
長谷川窯業研究所の協力のもと企画開発し、これ以降、富山ガラス工房だけに存在する色ガラスとして、様々な作品に姿を変えながら大切に受け継がれていきます。

2月 リビングセンターOZONEにて「made in T.G.S
—富山ガラス工房とデザイナーの試み—」展を開催



仕上りのフォルムを統一したことで、工房に所属する作家たちの個性がより際立つアイテム、ガラスの蕎麦猪口「CHOCO」と、円筒形の照明器具「AcKALI」を、工房の定番商品として展示・販売。多彩な作家たちが集う富山ガラス工房を首都圏の2会場と福岡県でPRしました。

‘03 5月 富山国際会議場アートサロンにて「春景 2003
—山野草とガラスが奏でる造形美—」展が開催される
いけばな作家の浦田和夫氏とのコラボレーションは、2000年の「一花一葉～花の心をガラスに寄せて～」展に続いて2回目。県内のガラス作家19名の作品は、雪割草やマツムシソウなど山野草の自然な色合いに映えるよう、浦田氏との打ち合わせを重ねて制作されました。



‘04 小杉高校の校外学習として吹きガラスの制作過程を
学ぶ講座が始まる

美術を選択する2・3年生が対象。溶けたガラスを竿に巻き取る方法から始まり、自分でグラスや皿を作ることができるよう、富山ガラス工場の所属作家が指導にあたる授業は、毎年恒例となりました。



10月 富山ガラス工房に、プロの作家向けのレンタル施設「創作工房」が増設される



同時期に富山ガラス工場のショップに増設された「ギャラリー」の展示什器と空間コーディネートは、インテリアデザイナー近藤康夫氏によるもの。



プリン型の展示台は、近藤氏によって「作家が完成させるキャンパス」に見立てて設置され、現在もショップで活用されています。

‘05 11月 富山市民プラザに市所蔵のガラス作品を展示
するガラスアートギャラリーが開設される

‘06 10月 「越の国 私が輝く華の器」
制作体験イベントを開催

いつもは料理を作り盛り付ける側にまわることが多い女性に非日常を味わってもらおうという企画。一般の女性参加者が富山ガラス工房でガラスの皿をデザインして制作し、その皿に合わせて、とやま自遊館の料理長が盛り付け、ガラス作家と参加者がテーブルを囲む華やかな食事を開催しました。この企画はシリーズ化され、キャンドルスタンドの制作体験をしてクリスマスディナーを楽しむ会や、五万石千里山荘との共催での「和とガラスの宴」が催されました。

‘07 富山ガラス工房オリジナル色ガラス「越碧」が第47回
富山県デザイン展のグランプリに輝く



オリジナル色の第2弾は、富山の海の色がテーマ。富山大学理学部の無機・化学研究室の金森教授の協力のもと開発されました。この「越碧」のデカンタに柘田酒造の純米大吟醸を詰め酒器2点とともに桐箱にセットして限定販売。産学官共同のプロジェクトという点に加えて、ガラスの深く美しい碧色が高く評価され、受賞に繋がりました。

9月 悠久の森2007のサテライト会場として富山
ガラス工房フェスタを開催

呉羽丘陵に、人で賑わう新しい里山のモデルを地域とともに作りだす「悠久の森」運動。連携事業の一環として、富山ガラス工房ではフェスタを開催し、吹きガラスの無料体験で賑わいました。

‘08 瀬戸内寂聴氏が富山ガラス工房を来訪



09 4月 富山ガラス造形研究所が専門学校の認可をうける

9月 富山エクセルホテル東急「リコモテ」において、月刊『Tact』、FMとやま「気ままプラン」、富山ガラス工房との合同企画「ガラスでスペシャルランチパーティー」が開催される

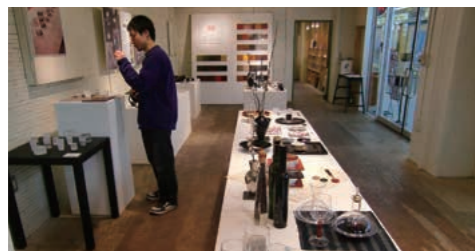


本企画のために富山ガラス工房の所属作家11名が制作した器に合わせて、上林料理長がサラダや肉料理を盛り付け、ランチパーティーの参加者による人気投票が行われました。この異色のコンペでグランプリに輝いたのは、岸本耕平作「白朱大皿」。

10月 富山市ファミリーパークと富山ガラス工房の共催で「呉羽そば」イベントを開催

呉羽丘陵で育てられた蕎麦を打つだけでなく、竹細工体験で制作したすのこや箸を使い、富山ガラス工房でガラスの蕎麦猪口の制作体験をして、蕎麦を食べるという企画。地元呉羽の自然と文化を2日間かけて満喫していただきました。

11月 金属、ガラス、漆を組み合わせた作品展「Metal Glass Japan」にて、高岡の伝統工芸の銅器や漆器の作家とガラス作家が協力して制作した器を発表



各素材の頭文字から、ブランド名は「MGJ」。高岡デザイン・工芸センターと富山ガラス工房の共同事業は2008年に始まりました。それぞれの素材がもつ魅力を引き立てあう新たな「富山ブランド」の創造を目指して試作を重ね、製品化された御重や酒器などをお披露目しました。



筒状のガラスと漆塗の皿を組み合わせ合わせた御重は、星野リゾート「界 箱根」にて前菜用の器として使用されています。

10 3月 「ガラスの里」に富山ガラス工房宿舍棟、アーティスト・イン・レジデンスを増築

3月 富山国際会議場1F交流ギャラリーで富山のガラスと新酒フェア連携イベント「酒と響きあう器との出会い」展を開催

富山県内の18の蔵元、1カ所につきガラス作家1名が担当し、それぞれの蔵元で醸造される地酒や風土、歴史を学び、感じ取ったことを主題として酒器を制作する連携イベントは、2007年に始まりました。個性豊かな酒器は「富山の地酒新酒披露さき酒会」で展示され、新酒を味わいながらの人気投票も恒例行事。



「富山のガラスと新酒フェア」の開催期間中、富山ガラス工房では「Myぐいのみをつくらう!」という体験メニューが設けられ、自作の酒器で富山の地酒を楽しんでもらおうという企画は、県外からの観光客にも毎年好評です。



2014年のポスター



2020年のポスター

3月 ガラスを見ながら街歩き「SUGOROKU GLASS IN TOYAMA」が開催される

富山市まちなかの和菓子店や呉服店などの店先に、県内在住の19名のガラス作家の作品を展示。商店街を双六に見立て、各店舗を廻りながら、様々なガラス作品やスタンプラリーを楽しんでもらおうという企画。20軒のお店がガラスで繋がりました。



富山ガラス造形研究所出身のガラス作家、サブロウ氏の発案で、2004年にスタート。富山市中央通り商営会青年部とNPO法人富山観光創造会議の共催。

3月 富山ガラス工房のロゴデザインなどが評価され、宮田裕美詠氏が第18回とやまクリエイター大賞を受賞

TOYAMA GLASS STUDIO

11 1月 陶芸家の加藤委氏を招いて、富山ガラス工房でワークショップを実施



加藤委(かとうつぶさ)氏は、刃物のような輪郭が特徴的な青白磁の作品で知られる陶芸家。2009年に富山ガラス工房を訪れた際、陶芸とは対照的に、手で直接触れることができず、一瞬で形が決まってしまうガラスのダイナミックな制作スタイルに魅了されました。素材の流動感を作品に生かせるという点で、陶芸とガラスに共通する部分があると感じた加藤氏は、陶器とガラスを合体させたオブジェを構想し、富山ガラス工房に1週間滞在して、所属作家たちとの共同制作に取り組みました。この時の作品は、同年5月、日本橋高島屋美術画廊での「加藤委ーサンカクノココロ」展にて発表されました。

富山ガラス工房を訪れたガラス作家たち



5月 韓国・南怡島にて「日本富山Glass-Art招待展」が開催される



富山市ファミリーパークと春川市の「ナミナラ共和国」の友好協定2周年を記念した展覧会。富山ガラス造形研究所の教授陣や、富山県内で活動するガラス作家31名が出展しました。



5月 韓国陶磁財団主催の「2011京畿世界陶磁ビエンナーレ」にて「富山ガラスアート」展と題して展示を行う

7月 「富山のガラス器で旬味に舌鼓MAP」が制作される
キャッチコピーは「アートでごちそうを」。富山市内はもとより県外からお越しのお客様に富山のガラス作家の器を実際に手にとって使っていただき、その魅力に触れていただく機会を作ろうと富山市物産振興会が企画し、観光施設等で配布しました。



「富山のガラスと食の味わい事業」の第1弾として、富山市内の11の和食店が参加。各店舗ごとに担当する作家が酒器を制作しました。

11 7月 ガラス作家たちと料理人の競演
「～光の劇場～富山ガラス工房×リバーリトリート
雅楽倶2011」が開催される



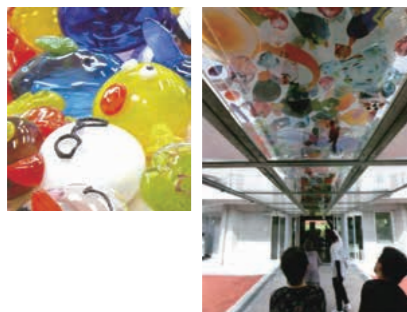
リバーリトリート雅楽倶内のレストランで、和食、フレンチを担当する2人の料理長とガラス作家7人によるコラボレーション企画。

お互いの料理や作品から着想を得ながらディスカッションを重ね、半年かけて制作した17種類の器は、舞台上に見立てられ、県内産食材の独創的な料理を盛り付けられて完成し、期間限定の「目にも楽しいランチコース」として提供されました。



10月 富山ガラス工房第2工房オープンを記念して、
市民参加ガラスアートプロジェクト「インсталレーションー光の架け橋ー」オブジェ制作が始まる

第2工房への渡り廊下の天井を透明なガラス張りのギャラリーに見立て、小中学生300人が制作したオブジェを飾るというインсталレーション。子供達の作ったオブジェが次世代にガラス工芸を伝える「架け橋」になることを願って企画されました。本事業の趣旨にご賛同いただいたアメリカンホーム保険会社の協賛により実現しました。



参加した子供達は、自由にデザインを描き、ガラスで制作するさいの色や形について工房のスタッフと相談して、制作体験に臨みました。
動物や花、太陽や星を象ったカラフルで楽しい300のオブジェは、今日も第2工房へ向かう人々を和ませ、ガラスの魅力を経験する場所へと誘っています。

11月 東京、市谷「KAGURAサロン」にて「富山の
ガラスと美酒と薬膳を楽しむ会」開催

お酒に合う美味しい薬膳料理とともに、富山の地酒をガラスの酒器で味わっていただくイベント。会場となったサロンのスペースにはガラス作家7名の作品を展示して、富山のガラスを広く知っていただく一夜になりました。



参加者には、テーブルから気に入ったガラスの酒器を選んでいただき、宴がスタート。
後半は「能作」製の錫の酒器に持ち替えていただき、富山の素材を満喫してもらおうという趣向でした。

12月 富山ガラス工房にカフェギャラリーを増築。ガラスのある日常を提案するカフェ クリエが誕生しました

12 9月 富山ガラス工房第2工房がオープン



9月 新庄北小学校の6年生が、第2工房にて卒業
記念のペーパーウエイトを制作

富山の子供達に、ガラスの魅力やものづくりの楽しさに触れてもらおうという企画。6年生たちは、富山ガラス工房の野田雄一館長から富山のガラス文化の歴史や、作品の制作過程についての授業を受けた後、完成したばかりの第2工房での制作体験に臨みました。

世界にたった1つの卒業記念品ペーパーウエイト体験は新庄北小学校をはじめ、富山市内の小学校の恒例行事となっています。



北日本新聞 9/20付

10月 「富山のガラスと華一新たる美の創造ー」
と題して、伝統的な各流派のいけばなとガラスの花
器のコラボレーション作品を発表

富山大和の催事ホールで開催された「創立45周年記念第8回いけばな芸術 信越展」の会場の一角と、1階ショーウィンドウを彩りました。



13 1月 ベネッセアートサイト直島に建設中の安藤忠雄
氏のミュージアムのための円錐形のガラス窓を制作

香川県直島のアートプロジェクトを牽引する安藤忠雄氏の依頼により、民家を改修して建物自体も安藤作品として見せるANDO MUSEUMの天窓を、富山ガラス工房で制作しました。



作り手の目測と勘を頼りに、宙吹き技法で制作された円錐形は、底径50cm、高さ60cm。
複数の作り手のチームワークによって大型の作品を制作するスタジオグラスの持ち味を發揮した「作品」は、ただ静かに建物の一部となり、瀬戸内の光を浴びています。

7月 「悠久の森2013 森に学ぼう」に向け神明・古沢
小学校の児童約200人がキャンドルホルダーを制作



悠久の森実行委員会のメンバーである富山市ファミリーパークと富山ガラス工房が、呉羽地区の児童に地域の自然と芸術に親しんでもらおうと企画。富山ガラス工房でガラスのキャンドルホルダーの制作体験を行い、イベント当日の夕方、富山市ファミリーパーク内の六泉池に浮かべました。

9月 富山ガラス工房に併設されたカフェ クリエの
メニューに「CHOCOっとデザートプレートが登場



富山ガラス工房の「定番商品」CHOCOの新シリーズ「花鳥風月」をオンラインショップと店頭で展開する際のPR企画として、カフェ クリエと連動して、4種類のデザートで4種類のCHOCOで味わっていただくというデザートプレートを提供。「一器多様」の器、CHOCOの持ち味を發揮するコラボレーションになりました。

10月 富山市役所と富山ガラス工房を結ぶ「グラス・
アート・シャトル」の運行が始まる



吹きガラス体験を楽しむ様子を描いたシャトルバスのデザインは、洋画家の安達博文氏によるもの。

14 3月 国内最大級の美術見本市「アートフェア東京
2014」に富山ガラス工房が初出展

富山県内の若手作家の飛躍のきっかけとなるように、前年9月に県内で実施した「アートフェア富山2013 アートアワード」の受賞者の作品を展示しました。

6月 上海市長寧区人民政府などが主催する「第4回
中日韓芸術招待展示会」に富山のガラスを出展する

ガラスを中心に県内作家12名の作品が海を渡りました。上海での展示会の開幕式では、富山ガラス工房の野田雄一館長が「若手芸術家の育成と富山ガラスについて」と題して講演を行い、日本の工芸品への関心が高まっている上海の人々に富山のガラスを印象づけました。



14 8月 20周年を迎えた富山ガラス工房が「～20年の感謝を込めて～ガラスフェスタ2014」を開催



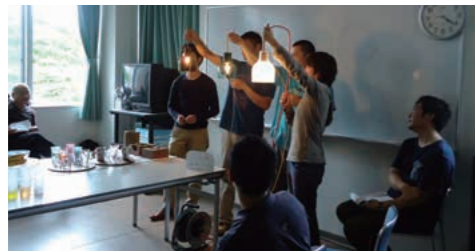
第2工房の2日間の来館者は3,000人。フェスタ恒例の無料ガラス制作体験は家族連れで賑わいました。

ショップでは「富山ガラス工房 歴代ガラススタジオ作家展」と題し、1994年のオープンから現在までの歴代の所属作家、約60名の作品を一同に展示



9月 高岡市デザイン・工芸センターと富山ガラス工房で「富山マテリアルワークショップ」が開催される

全国で活躍する8組みのデザイナーたちが、富山の素材に触れながら、商品化を目指した試作品の制作に取り組む3日間のワークショップ。1990年に富山県、富山市、高岡市が「富山から世界に発信するデザインムーブメント」をキャッチフレーズにスタートした「デザインウエーブ イン富山」の一環として毎年開催されています。



高岡会場では、地場産業の「鋳物」。富山ガラス工房では、吹きガラスの特徴と技術を活かし、工房の所属作家とデザイナーが相互にアイデアを交換し、試作を繰り返します。最終日には試作品を発表し、商品化を目指した第一歩を踏み出します。

10月 「富山ガラス工房 歴代ガラススタジオ作家展」を東京 青山のガラスギャラリー カラニスに場所を移して開催



15 3月 北陸新幹線開業

富山駅では、地域の産業と複合的に展開する「富山ガラス」を象徴する「フロアシャンデリア」と「トランジットライティングウォール」というアートプロジェクトが富山を訪れる人々を出迎えます。



富山駅と富山ガラス

新幹線富山駅の高架下自由通路の中央部分に整備された「フロアシャンデリア」。床面に埋め込まれた約800個の「メタルコート・アートガラスブロック」は、天井からの多彩な照明によって、時刻ごとに様々に変化する色彩、反射光と陰影による不思議な雰囲気を出しています。



このガラスブロックの工芸ガラスピースの部分は、株式会社梶原製作所で庄川の自然石のテクスチャーで金型を制作。株式会社ユニゾーンにてメッキ加工が施された後、三芝硝材株式会社で高透過ガラスカバーとの合わせガラスにされることにより、屋外使用も可能な耐久性と安全性を実現しています。



新幹線富山駅の高架下、路面電車停留所の装飾壁「トランジット・ライティング・ウォール」は青色と緑色を基調とした細長い工芸ガラスを組み合わせたガラスアートパネルで「山と海の文化、その融合」を表現しています。切子を施したハンドメイドのパーツを溶着し、新光硝子工業株式会社の樹脂合わせ技術や三協立山株式会社のアルミ構造設計・製作の技術を結集して完成しました。

6月 デイル・チフリー氏率いるシアトルのチフリースタジオのメンバーと富山ガラス工房 第2工房で富山ガラス美術館のための作品を共同制作



デイル・チフリー氏はアメリカで初の人間国宝に選ばれた現代ガラスアートの巨匠。1971年、ワシントン州に、国際的なガラス制作の教育施設、ビルチャック・ガラス・スクールを共同設立し、ガラスアートを牽引する人物です。その作品は200館以上の美術館に所蔵されています。



富山ガラス工房の所属作家たちが制作をサポート。一般公開日には大勢の見学者が、目の前で繰り上げられる迫力の制作風景に興奮しました。



この時に制作されたガラスの浮き玉(フロート)は95個。富山市ガラス美術館のシンボリックな空間、6階「ガラス・アート・ガーデン」のインスタレーション作品「トヤマ・フロート・ポート」に、神通川の漁で使用されていた笹舟とともに展示されています。

8月 富山市ガラス美術館 開館



16 9月 東京の「日本橋とやま館」で歌川広重の連作浮世絵『名所江戸百景』をテーマにしたCHOCOの新作を展示販売



富山県のアンテナショップのある日本橋にちなんで、広重の『名所江戸百景』から「亀戸梅屋敷」など8つの場面を選び、富山在住のガラス作家8人に制作を依頼。粋でモダンな器のかたちで「ガラスの街 富山」をPRしました。



10月 マレーシアの首都 クアラルンプールにオープンした伊勢丹The Japan Storeのフードコートの装飾に富山ガラス工房で制作されたガラスが使用される

12月 ガラス作家の相互交流事業によりオーストラリアで滞在制作した成果発表展が富山市ガラス美術館で開催される
国際的ガラスアートのネットワーク構築を目的に初めて実施され、富山在住の光井威善が、キャンベラ市の工房キャンベラ・ガラスワークスに派遣されました。「静寂(しじま)にとける」と題した展覧会では、日本クラフト展で「U35賞」に輝いた「Silence」とともに、現地で制作したオブジェなどを発表しました。

17 2月 富山エクセルホテル東急のレストラン「リコモング」にて「富山ガラス作家とのコラボレーション グランシェフディナー」開催

同ホテルのロビーには、富山を拠点に活動するガラス作家の作品を展示した「とやまのガラスギャラリー」が新設され、富山への来訪者に多彩なガラスアートを見ていただく場所になっています。



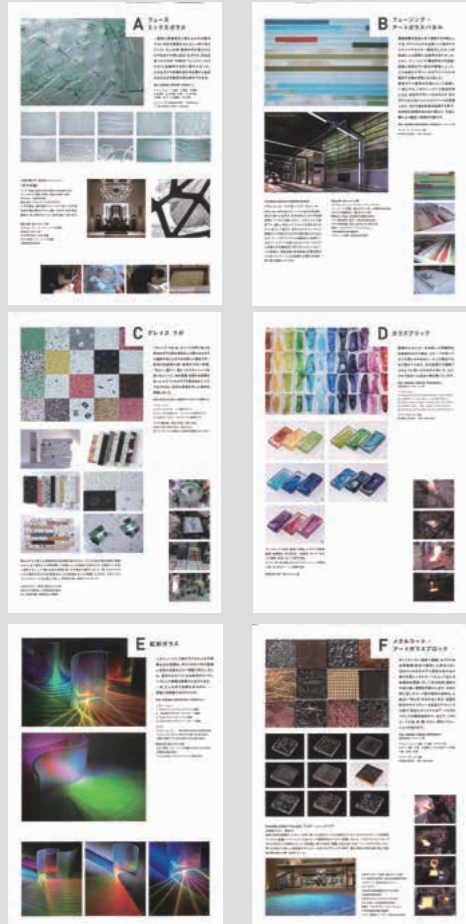
グランシェフ後藤浩実氏は、小林洋行のプレートに冷静野菜のテリーヌを合わせました。オブジェのような一皿。

17 3月 東京 六本木AXISにて「トヤママテリアル」展を開催

富山ガラス工房が主催し、富山で開発された素材とガラスの多様な組み合わせを提案する6種類の作品を発表。会場構成・ディレクションはインテリアデザイナー近藤康夫氏。



富山の素材と富山ガラス
ガラス+αの可能性を模索し、地元富山の企業とのコラボレーションによって生まれた「トヤママテリアル」は空間(壁・床)に個性を際立たせる新しいマテリアルです。
(富山ガラス工房 館長 野田雄一)



5月 『家庭画報』6月号の小特集「日本の美しいガラス器と暮らす」で富山のガラス作家が紹介される



富山ガラス造形研究所出身の小島有香子、富山ガラス工房出身の光井威善や小路口力恵の器に、リバーリトリート雅楽俱内「レヴォ」の谷口英司シェフが独創的な料理を盛り付けて、新たなガラスの魅力を引き出しています。

6月 NHK BSプレミアム『美の壺』「日本の国石〜ヒスイ〜」の回で、富山ガラス工房オリジナル色ガラス「越翡翠硝子」が取り上げられる



富山ガラス工房では「越翡翠硝子」の原料を調合する様子や、野田雄一館長が縄文土器と宇宙をイメージした作品を制作する場面が撮影されました。

18 6月 株式会社広貫堂が「オール富山のギフト」をテーマにした「エゴマ オイル」を販売

「モノだけではなく、その背景にある物語も一緒にギフトとして届けたい」という依頼により、富山ガラス工房がガラスのボトルを制作しました。



広貫堂エゴマゴールドブレンドオイルプレミアム2018

9月 富山市が「ガラスの街づくり」を世界に発信する初の国際公募展「富山ガラス大賞展2018」が富山市ガラス美術館で開催



9月 「富山ガラスラグジュアリーブランド化推進事業」が始まる

富山市が長年取り組んでいる「ガラスの街」づくりの一環として、「富山ガラス」の産業化を図るべく、戦略的に高付加価値を加えて世界に誇れる日本初のラグジュアリーブランドを目指すもの。富山でガラス制作に携わる作家たちが共同体となって、商品開発を進めた。



試験販売の第一弾では、ガラス薬瓶からヒントを得て「ボトムで遊ぶ」をテーマにしたグラスなどが提案された。

19 2月 日本橋三越での販売に先行してリバーリトリート雅楽俱の茶室で「プラスワンラグジュアリー」の花器を展示



20 2月 日本橋とやま館でフラワーアーティスト花千代氏と富山ガラス工房のコラボレーション花器を展示



2月 日本橋三越本店で「富山アイコンニック」ブランドデビュー展示会が開催される



《婦人画報》9月号

3月 富山のガラスと新酒フェアとの連動企画「とやまの新酒を飲み歩き」が開催される

富山市内の17店舗で、富山のガラス作家のくい呑みで特別メニューの「とやまの新酒 ほろ酔いセット」を提供。



5月 富山ガラス工房のオンラインショップでは「おうちで富山ガラス 万華鏡キット」が新発売され、連日売り切れとなる

10月 ガラスのフルートの演奏が初披露



管楽器専門月刊誌(パイパーズ)12月号

12月 富山ガラス工房オリジナル色ガラスの全5色完成を報じる記事が一面を飾る



北日本新聞 12/31付

21 1月 BSプレミアム「イッピン」で「ガラスの町に新しい風」と題して富山ガラスを紹介



